

一

僕は小さい時に絵を描くことが好きでした。僕の通っていた学校は横浜の山の手という所にありましたが、そこいらは西洋人ばかり住んでいる町で、僕の学校も教師は西洋人ばかりでした。そしてその学校の行きかえりにはいつでもホテルや西洋人の会社などがならんでいる海岸の通りを通るのでした。通りの海添いに立って見ると、真つ青な海の上に軍艦だの商船だのがいっぱいならんでいて、煙突から煙の出ているのや、ぼぼしらからぼぼしらへ万国旗をかけたわたしたのがあって、眼がいたいように綺麗でした。僕はよく岸に立ってその景色を見渡して、家に帰ると、覚えていただけを出来るだけ美しく絵に描いて見ようと思いました。けれどもあの透きとおるような海の藍色と、白い帆前船などの水ぎわ近くに塗ってある洋紅色とは、僕の持っている絵具ではどうしてもうまく出せませんでした。いくら描いても描いても本当の景色で見るような色には描けませんでした。

ふと僕は学校の友達の手持っている西洋絵具を思い出しました。その友達はやはり西洋人で、しかも僕より二つ位としが上でしたから、身長は見上げるように大きい子でした。ジムというその子の持っている絵具は舶来の上等のもので、軽い木の箱の中に、十二種の絵具が小さな墨のように四角な形にかためられて、二列にならんでいました。どの色も美しかったが、とりわけて藍と洋紅とはびっくりするほど美しいものでした。ジムは僕より身長が高くせに、絵はずっと下手でした。それでもその絵具をぬると、下手な絵さえがなんだか見ちがえるように美しく見えるのです。僕はいつでもそれを羨しいと思っていました。あんな絵具さえあれば僕だって海の景色を本当に海に見えるように描いて見せるのになあと、自分の悪い絵具を恨みながら考えました。そうしたら、その日からジムの絵具が欲しくって欲しくってたまらなくなりました。けれども僕はなんだか臆病になってパパにもママにも買って下さいと願う気になれないので、毎日々々その絵具のことを心の中で思いつづけるばかりで幾日か日がたちました。今ではいつの頃だったか覚えてはいませんが秋だったのでしょうか。葡萄の実が熟していたのですから。天気は冬が来る前の秋によくあるように空の奥の奥まで見すかされそうに晴れわたった日でした。僕達は先生と一緒に弁当をたべましたが、その楽しみな弁当の最中でも僕の心はなんだか落着かないで、その日の空とはうらはらに暗かったのです。僕は自分一人で考えこんでいました。誰かが気がついて見たら、顔もきつと青かったかも知れません。僕はジムの絵具が欲しくって欲しくってたまらなくなってしまうのです。胸が痛むほど欲しくなったのです。ジムは僕の胸の中で考えていることを知っているにちがいないと思って、そつとその顔を見ると、ジムはなんにも知らないように、面白そうに笑ったりして、わきに坐っている生徒と話をしているのです。でもその笑っているのが僕のことを知っていて笑っているようにも思えるし、何か話をしているのが、「いまに見ろ、あの日本人が僕の絵具を取るにちがいないから。」と喋っているようにも思えるのです。僕はいやな気持ちになりました。けれどもジムが僕を疑っているように見えれば見えるほど、僕はその絵具が欲しくてならなくなるのです。

二

僕はかわいい顔はしていたかも知れないが体も心も弱い子でした。その上臆病者で、言いたいことも言わずにすますようなたちでした。だからあんまり人からは、かわいがられなかったし、友達もない方でした。昼御飯がすむと他の子供達は活潑に運動場に出て走りまわって遊びはじめましたが、僕だけはなおさらその日は変に心が沈んで、一人だけ教場に入っていました。そとが明るいだけに教場の中は暗くなって僕の心の中のようにでした。自分の席に坐っていないながら僕の眼は時々ジムのティブルの方に走り

ました。ナイフで色々ないたずら書きが彫りつけてあって、手あかで真っ黒になっているあの蓋をあげると、その中に本や雑記帳や石板と一緒にあって、飴のような木の色の絵具箱があるんだ。そしてその箱の中には小さい墨のような形をした藍や洋紅の絵具が……僕は顔が赤くなったような気がして、思わずそっぽを向いてしまうのです。けれどもすぐまた横眼でジムのティブルの方を見ないではいられませんでした。胸のところがどきどきとして苦しい程でした。じっと坐っていながら夢で鬼にでも追いかけられた時のように気ばかりせかせかしていました。

教場に入る鐘がかんかと鳴りました。僕は思わずぎょっとして立上りました。生徒達が大きな声で笑ったりどなったりしながら、洗面所の方に手を洗いに çık かけて行くのが窓から見えました。僕は急に頭の中が氷のように冷たくなるのを気味悪く思いながら、ふらふらとジムのティブルの所に行つて、半分夢のようにその蓋を上げて見ました。そこには僕が考えていたとおり雑記帳や鉛筆箱とまじつて見覚えのある絵具箱がしまつてありました。なんのためだか知らないが僕はあっちこっちを見まわしてから、誰も見ていないなと思うと、手早くその箱の蓋を開けて藍と洋紅との二色を取り上げるが早いカポツケットの中に押し込みました。そして急いでいつも整列して先生を待っている所に走って行きました。僕は若い女の先生に連れられて教場に入り銘々の席に坐りました。僕はジムがどんな顔をしているか見たくつてたまらなかつたけれども、どうしてもそっちの方をふり向くことができませんでした。でも僕のしたことを誰も気のついた様子がないので、気味が悪いような、安心したような心持ちでいました。僕の大好きな若い女の先生のおっしゃることなんかは耳に入りは入ってもなんのことだかちつともわかりませんでした。先生も時々不思議そうに僕の方を見ているようでした。

僕はしかし先生の眼を見るのがその日に限ってなんだか嫌でした。そんな風で一時間がたちました。なんだかみんな耳こすりでもしているようだと思ひながら一時間がたちました。

教場を出る鐘が鳴つたので僕はほっと安心して溜息をつきました。けれども先生が行つてしまうと、僕は僕の級で一番大きな、そしてよく出来る生徒に「ちよつとこっちにおいで」とひじの所をつかまれました。僕の胸は宿題をなまけたのに先生に名を指さされた時のように、思わずどきんと震えはじめました。けれども僕は出来るだけ知らない振りをしていなければならぬと思つて、わざと平氣な顔をしたつもりで、仕方なしに運動場の隅に連れて行かれました。

「君はジムの絵具を持っているだろう。ここに出したまえ。」

そういつてその生徒は僕の前に大きくひろげた手をつき出しました。そういわれると僕はかえつて心が落ち着いて、

「そんなもの、僕持つてやしない。」と、ついであらめを言つてしまいました。そうすると三、四人の友達と一緒に僕の側に來ていたジムが、

「僕は昼休みの前にちゃんと絵具箱を調べておいたんだよ。一つもなくなつてはいなかつたんだよ。そして昼休みが済んだら二つなくなつていたんだよ。そして休みの時間に教場にいたのは君だけじゃないか。」と少し言葉を震わしながら言いかえました。

僕はもう駄目だと思ふと急に頭の中に血が流れこんで來て顔が真っ赤になつたようでした。すると誰だつたかそこに立つていた一人がいきなり僕のポケットに手をさし込もうとしました。僕は一生懸命にそうはさせまいとしましたけれども、多勢に無勢でとてもかないません。僕のポケットの中からは、見る見るマールブル球（今のビー球）や鉛のメンコなどと一緒に二つの絵具のかたまりが掴み出されてしまいました。「それ見ろ」といわんばかりの顔をして子供達は憎らしそうに僕の顔をにらみつけました。僕の体はひとりでにぶるぶる震えて、眼の前がまっくらになるようでした。いいお天氣なのに、みんな休み時間を面白そうに遊び廻っているのに、僕だけは本当に心からしおれてしまいました。あんなことをなぜしてしまつたんだろう。取りかえしのつかないことになつてしまつた。もう僕は駄目だ。そんなに思うと弱虫だつた僕はさびしく悲しくなつて來て、しくしくと泣き出してしまいました。

「泣いておどかしたって駄目だよ。」とよく出来る大きな子が馬鹿にするような憎みきつたような声で言って、動くまいとする僕をみんなで寄ってたかって二階に引っ張って行こうとしました。僕は出来るだけ行くまいとしたけれどもとうとう力まかせに引きずられて、はしごだんを登らせられてしまいました。そこに僕の好きな受け持ちの先生の部屋があるのです。

やがてその部屋の戸をジムがノックしました。ノックすると入ってもいいかと戸をたたくことなのです。中からはやさしく「お入り」という先生の声が聞えました。僕はその部屋に入る時ほどいやだと思つたことはまたありません。

何か書きものをしていた先生はどやどやと入って来た僕達を見ると、少し驚いたようでした。が、女のくせに男のようにくびの所でぶつりと切った髪の毛を右の手で撫であげながら、いつものとおりのやさしい顔をこちらに向けて、ちよつと首をかしげただけで何の御用という風をしなさいました。そうするとよく出来る大きな子が前に出て、僕がジムの絵具を取ったことをくわしく先生に言いつけました。先生は少し曇った顔付きをして真面目にみんなの顔や、半分泣きかかっている僕の顔を見くらべていなさいましたが、僕に「それは本当ですか。」と聞かれました。本当なんだけれども、僕がそんないやな奴だということをどうしても僕の好きな先生に知られるのがつらかったです。だから僕は答える代りに本当に泣き出してしまいました。

先生はしばらく僕を見つめていましたが、やがて生徒達に向つて静かに「もういつてもようございませす。」といって、みんなをかえしてしまわれました。生徒達は少し物足らなそうにどやどやと下に降りていつてしまいました。

先生は少しの間なんとも言わずに、僕の方も向かずに自分の手の爪を見つめていましたが、やがて静かに立つて来て、僕の肩の所を抱きすくめるようにして「絵具はもう返しましたか。」と小さな声でおっしゃいました。僕は返したことをしっかりと先生に知ってもらいたいので深々とうなずいて見せました。「あなたは自分のしたことを嫌なことだつたと思つていますか。」

もう一度そう先生が静かにおしゃつた時には、僕はもうたまりませんでした。ぶるぶると震えてしかたがない唇を、かみしめてもかみしめても泣声が出て、眼からは涙がむやみに流れて来るのです。もう先生に抱かれたまま死んでしまいたいような心持ちになってしまいました。

「あなたはもう泣くんじやない。よくわかつたらそれでいいから泣くのをやめましょう、ね。次ぎの時には教場に出ないでもよろしいから、私のこのお部屋にいらつしやい。静かにしてここにいらつしやい。私が教場から帰るまでここにいらつしやいよ。いい。」とおつしやりながら僕を長椅子にすわらせて、その時また勉強の鐘がなったので、机の上の書物を取り上げて、僕の方を見ていられましたが、二階の窓まで高くはい上がった葡萄づるから、一房の西洋葡萄をもぎって、しくしくと泣きつづけていた僕の膝の上にそれをおいて静かに部屋を出て行きなさいました。

三

一時がやがやとやかましかった生徒達はみんな教場に入つて、急にしんとするほどあたりが静かになりました。僕は淋しくつて淋しくつてしょうがない程悲しくなりました。あの位好きな先生を苦しめたかと思うと僕は本当に悪いことをしてしまつたと思ひました。葡萄などはとてもたべる気になれないでいつまでも泣いていました。

ふと僕は肩を軽くゆすぶられて眼をさしました。僕は先生の部屋でいつの間にか泣寝入りをしていたと見えます。少し痩せて身長の高い先生は笑顔を見せて僕を見おろしていられました。僕は眠つたために気分がよくなって今まであったことは忘れてしまつて、少し恥しそうに笑いかえしながら、慌てて膝の上からすべり落ちそうになつていた葡萄の房をつまみ上げましたが、すぐ悲しいことを思い出して笑ひも何も引込んでしまいました。

「そんなに悲しい顔をしないでよろしい。もうみんなは帰ってしまいましたから、あなたはお帰りなさい。そして明日はどんなことがあっても学校に来なければいけませんよ。あなたの顔を見ないと私は悲しく思いますよ。きつとですよ。」

そういつて先生は僕のカバンの中にそつと葡萄の房を入れて下さいました。僕はいつものように海岸通りを、海を眺めたり船を眺めたりしながらつまらなく家に帰りました。そして葡萄をおいしくたべてしまいました。

けれども次の日が来ると僕は中々学校に行く気にはなれませんでした。お腹が痛くなればよいと思ったり、頭痛がすればよいと思ったりしたけれども、その日に限って虫歯一本痛みもしないのです。仕方なしにいやいやながら家は出ましたが、ぶらぶらと考えながら歩きました。どうしても学校の門入ることは出来ないように思われたのです。けれども先生の別れの時の言葉を思い出すと、僕は先生の顔だけはなんとも見たくてしかたがありませんでした。僕が行かなかつたら先生はきつと悲しく思われるに違いない。もう一度先生のやさしい眼で見られたい。ただその一事があるばかりで僕は学校の門をくぐりました。

そうしたらどうでしょう、まず第一に待ち切っていたようにジムが飛んで来て、僕の手を握ってくれました。そして昨日のことなんか忘れてしまったように、親切に僕の手をひいてどぎまぎしている僕を先生の部屋に連れて行くのです。僕はなんだか訳がわかりませんでした。学校に行ったらみんなが遠くの方から僕を見て「見る泥棒のうそつきの日本人が来た」とでも悪口をいうだろうと思っていたのにこんな風にされると気味が悪い程でした。

二人の足音を聞きつけてか、先生はジムがノックしない前に、戸を開けて下さいました。二人は部屋の中に入りました。

「ジム、あなたはいい子、よく私の言ったことがわかってくれましたね。ジムはもうあなたからあやまってもらわなくともいいと言っています。二人は今からいいお友達になればそれでいいんです。二人とも上手に握手をなさい。」と先生はにこにしながら僕達を向い合せました。僕はでもあんまり勝手過ぎるようでもじもじしていますと、ジムはいそいそとぶら下げている僕の手を引っ張り出して堅く握ってくれました。僕はもうなんといつてこの嬉しさを表せばいいのか分らないで、ただ恥しく笑う外ありませんでした。ジムも気持ちよさそうに、笑顔をしていました。先生はにこにしながら僕に、

「昨日の葡萄はおいしかったの。」と問われました。僕は顔を真っ赤にして「ええ」と白状するより仕方がありませんでした。

「そんなら又あげましょうね。」

そういつて、先生は真っ白なリンネルの着物につつまれた体を窓からのび出させて、葡萄の一房をもぎ取って、真っ白い左の手の上に粉のふいた紫色の房を乗せて、細長い銀色のはさみで真ん中からぷつりと二つに切って、ジムと僕とに下さいました。真っ白い手の平に紫色の葡萄の粒が重って乗っていたその美しさを僕は今でもはっきりと思い出すことが出来ます。

僕はその時から前より少しいい子になり、少しはにかみ屋でなくなったようです。

それにしても僕の大好きなあのいい先生はどこに行かれたでしょう。もう二度とはあえないと知りながら、僕は今でもあの先生がいたらなあと思います。秋になるといつでも葡萄の房は紫色に色づいて美しく粉をふぎますけれども、それを受けた大理石のような白い美しい手はどこにも見つかりません。

底本：「赤い鳥傑作集」新潮文庫、新潮社 1955（昭和30）年6月25日発行

1974（昭和49）年9月10日29刷改版

1984（昭和59）年10月10日44刷

初出：「赤い鳥 第五卷第二号」 1920（大正9）年8月号